
シュール日和

油性鉛筆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シユール日和

【Nコード】

N2855F

【作者名】

油性鉛筆

【あらすじ】

ふと駄文が読みたくなる事ってあるよね？え、無い？お前がそんな奴だとは思わなかった。

第1回「激闘！ 甲子園大会！」

『さあ今年も始まりました、甲子園大会ー！』

真夏の甲子園。今年もいっぱい球児たちがここに集った。

『一回戦く準決勝までは読者の目の届かない所で既に行われ、今年も残すところは決勝戦のみ！ まずは北海道代表、牛乳高校ー！！』

ー牛乳高校スタメンー

遊撃 蟹本

二塁 海野

投手 蛸原

捕手 牛之乳

一塁 農場

三塁 口内炎

七く九番 考えてません

『それに対するは、第一回甲子園大会以来100年ぐらい連続で優勝しまくってる帝王高校ー！！』

ー帝王高校スタメンー

中堅 優勝 刷男

捕手 球 捕男

投手 球 投男

一塁 一塁 付近

右翼 右側煮 居男

左翼 左側煮 居男

三塁 三塁 裸変

二塁 一塁戸二塁之 間

遊撃 二塁戸三塁之 間

『いや、今年も帝王高校が決勝戦まで来ましたね、解説の秋山』

『はい、強いですね。てか呼び捨て？』

解説の秋山はしょんぼりした。

『しかし帝王高校は実は田舎の方の県にありますからね。ほらあの、地味に結構有名な歴史的事件があつたって言われている……』

『あ、確かピー県代表ですよ』

実況の山本は平然と県名を口にした。

『言うなよ！！ 俺何の為に伏せてるんだよ！！』

『あつ、すいません。テレビをご覧のピー県の皆様、ただ今不適切な発言があつた事をお詫びします』

『だから言うなよ！ 意味ねーだろうが！！ N H Kの放送規制の厳しさなめんなよ！！！！』

『あつ……すいません。て言うか秋山もそれ結構やばいだろ』

『えっ、マジで？』

て言うか、解説の秋山と実況の山本がぐだぐだ喋っている間にも激烈な試合は進行していたのであった。

『うおおー！！ この試合、この試合だけは負けられないんだアアッ！！』

『ああーっ、農場打ったー！！ ワンアウト二塁、なんか知らない間にワンアウト二塁になってて、そっから農場が打ったーっ！！』

『ぐおおーっ！！』

打球は左側煮のグローブを突き抜け、あつという間にフェンスに直撃した。

『わああーっ、今だ今だ！』

蛸原と牛之乳が続々とホームに突入する。

『ああーっ、やばい！ バッタランナーの農場までもがもうホームに着きそうだアアッ！！』

ライトの右側煮は農場が三塁を回ったのを見て声を荒げた。

「うおおーっ、しかし、しかしこの試合負けられないのは俺も同じ！ 70年ぐらい前、俺が生まれる前に死んだ婆ちゃんのためにも勝つんだア！ 顔も見た事ない婆ちゃんのためにも勝つんだアアーツ！！」

右側煮は絶叫した。そしてボールを放り投げた。風を切り裂く猛速送球はキャッチャーの頭を大きく越えてフェンスに直撃し、その間に農場は悠々とホームインした。

「ば、ばあちゃあああああーん！！！！」

右側煮は号泣した。それはもうごっそり泣いた。

「牛乳高校、なんか3点とったー！！」

「ええ。3対15とは言え、まだまだ逆転するチャンスはあります。頑張って欲しいですね」

「それ、秋山お前本気でそう思ってる？」

「思ってない」

（中略）

「さあー試合は大詰め九回の表、なんか、結局牛乳高校が結構頑張っただけで現在試合は25対28です！」

「牛乳高校、頑張りました。私は必ず追いつけると信じてました」

「黙れ！ そして、なんか試合は都合良くツアアウト満塁！ ここでバッターがホームランを打てば逆転です！」

「おほっ！」

「ここで迎えるバッターは……、え……、バッターは、なんか七番の人ー！！」

「なんか七番の人！？ 何それ！？」

牛乳高校の七番の人は場内アナウンスを聞き驚愕した。

「なあ蟹本！ 何で俺名前前で呼んでもらえないの！？」

「名前決まってるんだから仕方ないだろ！」

「名前決まってるって何！！？ 俺名前あるよ！？」

「うるさい黙れ！ 帰れ！ さつさと打ってこい、死ね！」

「ええ〜……」

「うおーっ、頑張れなんか七番の奴！」

「打て七番ーっ！」

ベンチやスタンドから七番の奴を応援する声援が飛び交う。

（ええ〜何これ……！？ みんなどんな自分ルール設定してんの……！？ て言うか何かの宗教！？）

「フッフッフ……、七番よ、お前に俺の球は打てん」

帝王高校エース、球は満塁にも関わらず大きく振りかぶった。

『おーっと球くん、凄い自信だ！』

「ぬがあああーっ……！！」

球は鬼の様な形相で腕を振りぬいた。そのスピードは150km/hを遥かに越えた。

「フッフッフ……見たか。これが俺のボールよ」

不敵な笑みを浮かべるピッチャーの球。そしてキャッチャーの球は立ち上がりマスクを外した。

「おーい球！ ランナーいるぞランナー！ セットポジションだーっ！」

（え……えええ〜っ……！！？）

ピッチャーの球は驚愕した。

「ピッチャー落ち着けーっ！ 満塁だ満塁！ 状況確認しろーっ！」

「ランナーいるぞっ！ 大丈夫だ、俺達がついてる！ 落ち着いて投げろー！」

ファーストやサード、外野からもピッチャーを励ます声が飛ぶ。

（え……えええええ〜……！！？）

ピッチャーの球はもの凄くげんなりした。

（お……お前ら空気読めよ！ 明らかにランナーいるの分かってて振りかぶってるんだろっが！ 「ランナーいるけど最早バッターとの勝負しか見えていない」みたいな雰囲気出てただろっが！ 落ち着いて投げろじゃねえよ！ ぶっ殺すぞ……！！）

「大丈夫だ球！ バックを信じる！ 例え骨が折れようと、お前を
負け投手にはしねえ！」

（ええゝむ、無駄に感動的ゝ……………！！）

ピッチャーの球は観念し、素直にセットポジションをとった。

「うおりやああああーっ！！」

ピッチャーの球は絶叫した。

「うおおおおーっ！！」

七番の奴も絶叫した。そして無心で振りぬいたらなんかバットの
芯はボールを捉え、ボールは軽々と吹っ飛びスタンドに飛び込んだ。

『お………… おおおおーっ！ ぎゃ、逆転満塁ホームランやーっ！』

甲子園が湧く。大歓声が耳を劈き、一斉に立ち上がる観客でスタ
ンドが揺れる。

「な………… 七番が打ったーっ！」

七番はゆっくりとダイヤモンドを一周した。俺の名前は○×だよ
！ と心の中で叫びながら。

「うおおおおーっ！！」

ホームベースを踏んだ七番の元に牛乳高校のナインが飛び付いた。
まるでもう優勝したかの様な大騒ぎ。

「七番ーっ！ 最高だー！」

「よっしゃあああああ！」

「イヤッホオオオオウ！」

その時、人が絡み合うその塊の中からエースの蛭原が押し出され、
よろめき二、三步後退した後にバランスを崩し尻餅をついた。

ポキッ

体を支えようと咄嗟に差し出した右手首。

「……………。折れたかもしれない……………」

「……………」

「……………」

「……………」

甲子園のスタンドが一瞬で静まり返った。

その裏、帝王高校は500点ぐらい取って勝ちました。

第1回「激闘！ 甲子園大会！」（後書き）

読んでくれてありがとう。物凄く嬉しいです。

もし少しでも楽しいと感じる部分を見つけてくれたら、更に500倍（当社比）は嬉しいです。

更に評価や感想も書いてくれればその20000倍は嬉しいです。と言う事で皆さん、評価書いていこうよ。

第2回「楽しい！ 老人疑似体験！」

——皆さんこんにちは、高校二年生です。名前は特に決まっていません。今日は、クラスのみんなで「老人の気持ちを知ろう協会」の老人疑似体験イベントに参加しにやってきました。

「え、今日は皆来てくれてありがとうね。いろいろ体験しちゃっていいね」

インストラクターの老人おじいさんのまじりこみ之氣持煮鳴男。情け無い中年顔をしている。

「え、じゃあまずね、早速だけど大人気体験やります」

そう言ってインストラクターは皆の前に食事を並べた。

「え、………つと、これは何ですか？」

担任の女先生が困った顔をする。

「老人というものはね、もう往々にして味覚とかもアレしてきます。ですからこの食事では、普通の食事でも老人からするとこんな感じになりますっていうのが分かる様に薄味になっています。あと歯とか顎とかも弱くなってくるんで通常の食事より粘着力を高めてなかなか噛み切れないようになっていきます」

「……………」

（ええええ………！）

担任の女先生がげんなりした。

（何………！？ 何その奇抜な老人疑似体験！ 聞いたことねえよ！）

「あ………ま、まあね、じゃあ皆さん、せっかくだから食べてみましょう」

「は……い」

生徒達は食事を口へと運んだ。

「……………」

「薄い……」

「薄い……ね……」

「薄い……。あと噛み切れない……」

「おばあちゃん達……、普段こんなの食べてたんだ……」

生徒達は皆げんなりした。

（うわあ……、皆いきなりげんなりしまくっちゃってるよ……。
大丈夫なのこれ……！？）

——二時間後。

「はいっ。皆さん完食してくれちゃったかな？」

（長い……）

（食事に二時間もとるなよ……）

（薄かった……）

「はい、皆美味しく食べてくれた様で嬉しいです！ では、次は映画鑑賞です」

（美味しく食べてねえよ！！）

（あ……でも映画！？ これは楽しそう！）

（スクリーンとか大きいし、これは期待できるぞお！）

「えっ……インストラクターさん、老人疑似体験で映画って一体……」

「はい。老人っていうものは趣味とかも若者とかと大分ズレてきます。ですから私達若者が楽しんで観ている映画でも老人達にとつては退屈です。そういった気持ちを理解する為、これから観る映画はかなりつまらなく作られています」

生徒達はしょんぼりした。

（えええええ……！！ 斬新！ 無駄に斬新すぎるんだよ！

！ そりゃ生徒しょんぼりするよ！！ もっと視力とか聴力とか、普通の事やれよ！！） て言うかお前若くねえだろ！！）

「はい、じゃあ映画始まりま〜す」

そう言う部屋の大スクリーンは片付けられ、教壇の上に置かれた16インチのテレビで映画が始まる。

担任は教室後方の掃除用具箱からモップを一本取り出した。

（ス……スクリーン使えよおおおおー！！！！！！）

両手と右膝を効果的に使い、モップをへし折った。

（なんでスクリーン使わねえの！？ 何の為のスクリーンだよ！

16インチじゃ後ろの方の子見えないよ！！ 老人の気持ち体験できないよ！！ どっちかと言うと視力の衰退を体験しちゃうよ！！）

——五時間後。

「はい、映画はこれで終了です」

（長い……）

（こんなクソ映画に五時間もとるなよ……）

（全然見えなかった……）

外は既に真つ暗である。

「次は、老人の歩にくさを体験してもらいます」

（おおっ……！ ようやくまともなのが……）

「人間は年をとるにつれ筋力が低下し、私達若者と比べてハンディキャップを負っていると云えます。老人の負うハンディキャップは相当なものです」

（おおっ……、ちょっとまともな事を……）

「ですから、老人の負うハンディキャップを体験してもらう為、これから皆さんの足を折ります」

（足をー！！？）

「なっ……、なんだそれ！」

「なんでお前に足折られなきゃいけないんだ！ ばかやろう！」
生徒達は文句を垂れた。

「しょ、しょうがないだろうが……。老人擬似体験なんだから」

（だからって何で足を折るんだよ！！ もっとなんか……、それ用のアレとかで膝固定したりするアレとかあるだろうが！！ て言うか、いくら老人だってそこまで歩き難くはないよ！！ 老人が負ってるハンディキャップを越えちゃうよ！！）

「え……えっとインストラクターさん、流石に足を折るのは……」

……」

「えゝマジ？」

「マジです……」

「え……て言うか、今ので体験イベントは終わりですが……」
「……」

三日後、老人の気持ちを知らう協会は潰れました。（PTAの猛反対に遭い）

第2回「楽しい！ 老人擬似体験！」（後書き）

同情するなら評価くれ

第3回「ゆけ！ 井太くん！」

・ a c t 1

「牛井！ 牛井！ 牛井が食いてえよおおおお！！」

牛 ^{ぎゅうどんた} 井太は叫んだ。彼の必殺技は下段蹴りで、「ほおおおい！

！！」の掛け声と共に放たれるそれは超一級品だ。

自分の部屋を飛び出し、階段を駆け下りる。階段を降りた所で、母が井太を迎えた。

「井太おはよう！ 今日の朝ごはんは白メシにお味噌汁よ！」

「ほおおおい！！！！」

・ a c t 2

「うおおおお！ 牛井！ 牛井が食いてえよおお！！！」

家の玄関を飛び出した時、父が井太を呼び止めた。

「井太、おはよう！ 学校の帰り、ちょっと牛肉を買ってきてくれないか？」

「えっ！？」

井太は目を輝かせた。

「今日、夜ご飯クリームシチューにするから」

「ほおおおい！！！」

・ a c t 3

「わああああ！ 牛井が食べたいよおおおお！！！！！」

「井太くん、おはよう！」

「あつ、先生！ 先月30歳の誕生日を迎えたのに人にはまだ20代って言ってるマチコ先生！」

「コ……コラァッ！」

「てへへ」

「ん〜うもう！ 今日の給食は牛丼だけど、井太くんは給食又キです！」

「ほおおおい！！！」

・ a c t 4

「ハッピーバースデーチュ〜ユ〜！ ハッピーバースデーイチュウウユウ〜！」

「わ〜い！ 井太くん、お誕生日おめでーと！」

「イエ〜イ！ みんなありがとう！」

「はい井太くん、これお誕生日のケーキ！」

「ほおおおい！！！」

・ a c t 5

「お父さん、井太に何かお弁当買ってきていきましょ」

「お、そうだな」

「う〜ん、あと残ってるのは牛丼とフォアグラ弁当ね」

「牛丼とフォアグラ弁当！？ ここ何て店！！！！？」

（え……えええ〜？ 井太は牛丼好きだが……ここはいくら何でもフォアグラだろ！？ うん……大丈夫！ 流石にフォアグラを選ぶだろう！！）

—— 帰宅

「はい井太、お土産だ！ フォアグラ弁当！」
「ほおおおい！！！」

・ラストアクト

「おはよう！ あけましておめでとう！」
「あ、おはよ。あけましておめでとー。今日の朝ごはん何？」
「きよっ……今日は、お、おせちだ……」
「やったあ！ やっぱりお正月はおせちだよね！」
（これは……井太じゃない！ 偽者………！！！！）

第3回「ゆけ！ 井太くん！」（後書き）

実は私、別名でもつくそ真面目な連載小説書いてます。
それが私と同一人物だという事は分からなくても、もう一つの名前
自体は結構、知ってくれている方も多いと思います。

探さないで下さい（連載が終わる為）

第4回「目指せ！ 天下統一！」

全国的にも結構有名な本能寺の変。実はその三日前、決して語られる事の無い戦いが開かれていた。

「えゝ……そんなじゃ、誰天下統一する？」

「普通俺だろ俺。あの明智小五郎と名字一緒なんだよ俺。明智とかマジ珍しくね？」

「いや俺だし。豊臣ナメんなよ。俺刀狩りとかしちやってんのよ？」
「知らねーよ。つーか秀吉お前、今まだ本能寺の変とか起こる前つて設定だぞ。お前まだ刀狩りとかしてなくね？」

「マジで。じゃあ今のカットで。つーか、光秀は何でお前本能寺の変起きるつて知ってんだよ。お前信長殺す気満々じゃね？」

「マジで？ 俺光秀に殺されんの？」

有名武将、織田、豊臣、明智の三人は織田の家に集まり、誰が天下統一するか話し合っていた。

「何何？ やっぱ話し合いじゃ決まらんの？」

「つばいね。なんか光秀の野郎が身の程つてもんを分かってないらしいから」

「あ？ それお前だし。マジお前ぶっ飛ばすよ？」

「やってみろし」

「あゝあゝ、じゃあやっぱりいつもので決めるか」

「御意」

そう言つと織田は懷からトランプを取り出し、シャッフルを始めた。

「また大富豪かよゝ。秀吉マジ強えーんだもんなゝ」

「光秀とは頭の出来がちげーんだよ」

「あ、何々？ ちょっと勝ちが続いてるからつてお宅調子乗ってね？ 俺まだ本気出したこと無いつて知ってる？」

「マジ？ 超奇遇じゃん。実は俺もだわ」

「えっマジで？ 光秀も秀吉も本気出したことねーの？ マジかよ
く今まで三人共本気じゃなかったのかよ」

「これマジでトリビアじゃね」

「トリビアって何？」

「あつ……ごめんこれもまだだったわ」

「それは幾らなんでもまだまだすぎじゃね」

「つーか、この時代もうトランプとかってあんの？ もしかしてまだ生まれてないんじゃない？」

「おい光秀。ちよつと年表で調べてみる」

「えーつと……あ、ヤベ。トランプって十九世紀発祥だって」

「マジで？ まだまだ先じゃん」

「じゃあ俺らまだ大富豪やっちゃダメってこと？」

「まあ……、物語上そうなるよね」

「あつ、十二世紀ぐらいには中国でそれらしきものが存在してたっ
てさ」

「えー……それなんか怪しくね？」

「あゝ、光秀の気持ちメツチャ分かるわ。絶対ジョーカー無しとか
だよ」

「マジで！？ ジョーカーねえの！？ ジョーカー無しとかマジテ
ンション下がるわゝ」

「ジョーカーねえと革命とかやりにくいし。革命起きねーとかマ
ジ萎えるし」

「えっ？ つーか革命起こす時って普通ジョーカー使っちゃダメじ
やね」

「えっ、何それ何それ？ その地方ルール初耳なんですけど」

「いやお前の方が地方だし。マジお前いい加減にしるよクソ猿」

「あゝ！ お前今クソ猿って言った！？ 俺天下統一してんのよ！
？ もうそついう小学生レベルのあだ名で呼ぶのやめてもらえる！
？」

「天下統一してるって何！！？ これから誰が天下統一するか決め

んじゃねーの！！？ えっ！？ まさか秀吉が天下統一すんの！？
「えゝマジテンション下がったわゝ！ ネタバレとかマジありえねえわゝ！」

「ご……ごめん……………」

「今更謝られたって遅いしゝ。どうやっても知らなかった頃には戻れないんですゝ」

「いや、信長なら頑張れば割と忘れられんじゃね」

「どっという意味！！？ 別に痴呆とか来てねーよ！！」

「いや、まあそれは良いとして……何？ マジで秀吉が天下統一すんの？」

「あ……まあ一応、天下統一するっばいわ」

「えゝ何何？ どっという経緯？」

「あゝえつと、まず光秀が信長殺すんだよね」

「えゝもうマジかよゝ！！ 俺光秀に殺されんの！！？」

「んで、俺が光秀殺して天下統一」

「うわゝマジそれ横取りじゃね？ ホント萎えるわゝ」

「『織田がこね 羽柴がつきし 天下餅 座りしままに 食うは徳川』じゃん」

「うわっ、何だっけそれ？ すっげー聞いた事ある」

「っーか徳川？ 徳川何で出てきたの？ 俺どこ行つたの？」

「いやもう良いよどうでもさゝ。どーせ俺光秀に殺されるしゝ。秀吉は横取りするしゝ」

「ふてくされんなって信長ゝ。俺だつて秀吉に殺されんだぞ」

「あゝもう、マジ秀吉ねえわゝ」

「まあまあ。もうとりあえずどうしようもねえじゃん。俺らも準備始めようぜ」

「マジ気乗らねゝ」

「やる気出せつて信長。んじゃ、とりあえず三日後本能寺でな。俺お前ぶつ殺すから」

三日後——本能寺で織田信長の生涯は幕を閉じたのであった。

第4回「目指せ！ 天下統一！」（後書き）

本当は大富豪をやっているシーンも描く予定つもりでしたが、限界だったのでやめました。

第5回「わかりにくっ！ 2人の陽子ちゃん！」

松本家のうっかり雅子さんは、うっかり者なので二人の娘に同じ名前をつけてしまいました。これは大変！ とても分かりづらいですね！

それでは、松本家の生活の様子を見てみましょうか？

・ a c t 1

「陽子ー。ちよつとスーパーで卵買ってきてくれる？」

『はいーい』

—— 十分後。

『はいお母さん。卵』

二人の陽子は、揃って卵を差し出しました。

「二人共……」

雅子お母さんは、2パックの卵を両手に持ちます。

「買ってきちゃったのかよ！！！」

雅子お母さんは両手に卵を持ったまま思い切り手を叩き、卵をグチャグチャにしていきました

・ a c t 2

「陽子おー。お母さんもうクタクタ。何か晩ごはん作ってくれない？」

『はいーい』

—— 十分後。

『はいお母さん。晩ごはん』

雅子お母さんの目の前に、夕食が2人前並びます。

「二人で……」

「協力して一つのもの作れよ!!!」

・ a c t 3

—— 歯医者。

「松本陽子さ〜ん」

『はい』

「こら陽子！ 行くのは一人だけで良いのよ！」

『はい』

そう言っつて片方の陽子は座り、残りの陽子は診察室へと向かいま
した。

「あ、松本陽子さんですね〜」

丸い眼鏡にたるんだ頬の肉。優しそうな先生だ。

「はい、横になって下さ〜い」

「はい」

陽子は診察台に横になり、大きく口を開きます。

「え〜つと……、君はどっちの陽子ちゃん？」

「虫歯の無い方の陽子です」

「お前が……」

先生は両手で白衣の肩口を掴みます。

「来ちゃったのかよ!!!」

魂のシャウトと共に、先生は白衣の肩口から先を引きちぎりました。

第5回「わかりにくっ！ 2人の陽子ちゃん！」（後書き）

この話、ちょっと好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2855f/>

シュール日和

2010年11月16日04時27分発行